

百済と枚方

枚方/百済フェスティバルも10周年を迎えました。枚方中宮にあります国指定の特別史跡百済寺跡を顕彰しようという目的で始めたフェスティバルですが、今年は10周年ということで特別イベントを企画致しております、明日は市民会館の大ホールで催しが計画されています。チラシをご覧頂けたかと存じますが、京都大学の名誉教授で日本古代史の最高権威でいらっしゃいます上田正昭先生の講演がございます。タイトルは「百済寺と百済王神社」ということになっておりますが、広く百済と枚方の関係をお話し頂けるものと思っております。

私の話を聞いてくださった方は明日ぜひ上田先生の講演をお聞きください。チケットは受付で販売しておりますので、よろしくお願い申し上げます。

さて今日は、明日の講演のイントロダクションとして、これまで毎年お話しして参りました内容を要約しまして30分という短い時間でお話しさせていただきます。

(1) 三国時代初期と倭国

朝鮮半島の古代に三国時代という時代がありました。高句麗、百済、そして新羅という3つの国が鼎立していた時代であります。現在の北朝鮮に当たるところを主として領域にしていた高句麗、韓国の西半分にあたる地域にあった百済、そして東半分にあたる地域に栄えた新羅が、互いに勢力を争った時代です。実は百済と新羅に挟まれた所に伽耶という地域がありましたが、ここは小さな部族国家が寄り集まっていて統一国家を形成していませんでした。倭国が半島への進出拠点としたのはこの伽耶であり、特にその中の主要国である金官伽耶だったのです。

三国時代は西暦で言えば、313年に高句麗が中国の一部であった楽浪郡と帯方郡を滅ぼして半島から中国の勢力を追い出した時から、新羅が百済を660年に滅ぼし高句麗を668年に滅ぼしたのちに、半島から唐の勢力を一掃して統一新羅を建設した676年までの360年に亙る時代ということになります。そしてこの時代をその状況から見て初期、中期、後期の3つに分けることができます。

三国時代の初期はわが国ではどの頃かと言いますと、神功皇后や応神天皇の頃から倭の五王の時代、即ち河内王朝と言われた時代の終わりの頃までです。その倭国が最初に百済と接触を持ったのは、366年に斯麻宿弥(しまのすくね)が伽耶の卓淳国に遣わされ、その使者が百済を訪問した時でありました。百済はその頃高句麗の圧迫に対して倭国と同盟したいと考えていた時でありました。その結果、倭はその後すぐに軍隊を半島に派遣し、百済を援助して高句麗や新羅と戦っております。

372年には百済の肖古王が倭王に有名な七枝刀を贈ります。国宝に指定されていて天理の石上神宮にあります。百済王が倭との同盟の印として贈ったものです。391年から407年までの新羅や高句麗との戦いの様子は、高句麗の首都であった集安というところに建てられている「広開土王碑文」に記されています。高句麗の広開土王の活躍を顕彰する内容のものですが、倭の軍隊が新羅を席卷する様子や高句麗の平壤まで攻め込んだことが書かれています。これによって4世紀末から5世紀の初めに掛けて倭軍が半島のかなり奥深くまで攻め込んでいたことが分ります。

475年には高句麗が百済の首都である漢城を攻略し、時の百済王蓋鹵王を殺害します。その子の文周王はたまたま新羅に行っていて無事でしたが、漢城には戻ることができずに都を熊津(現在の公州)に移します。高句麗の南下政策により百済は南の方に後退させられたわけですが、百済もまた更に南方にある馬韓や伽耶などの地域に積極的に進出するようになって、新羅との抗争が激化する

ことになります。

(2) 三国時代中期と継体王朝

百済の積極的な進出に大きな貢献をした王に第25代武寧王があります。武寧王は九州唐津の沖にある加唐島で生まれておりますが、501年に即位しています。継体天皇の即位は507年ですから、それより少し早い即位ということになりますが、継体時代の殆どが武寧王の時代と重なるわけです。韓国中清南道公州にある武寧王の墓からは日本の高野槇で出来た棺が発見されました。また桓武天皇のお母さんである高野新笠は武寧王の子孫に当たりますから、武寧王はわが国にたいへん縁の深い王様であることになります。

継体天皇は、前王朝が武烈天皇に子が無かったために途絶えてしまいましたので、大和の豪族たちが協議して越前の豪族であった男大迹王（おおどのおう）を迎え入れたものであります。天皇家が万世一系ではなく継体天皇から交替しているのだという説があるのはこうした事情によるのです。男大迹王は応神天皇5世の孫で皇統に属するという系図がありますが、日本書紀が書かれた時代には5代目までを皇族として認められましたので、そういうところから系図がでっち上げられたのだというのが定説のようです。男大迹王は、招請のために出向いた大伴金村が「居ながらにして大王の風格があった」と認めた程の人格者だったようで、越前には九頭竜川の治水などの伝説も残されています。福井市には大王の銅像も立てられています。

大伴金村と男大迹王との仲を取り持ったのが河内馬飼首荒籠（かわちうまかいのおびとあらこ）でした。馬飼首とは馬を飼う集団のボスということでしょうし、荒籠というのは安羅の人という意味です。安羅は伽耶地域にあった国の一つでした。荒籠と男大迹王とは馬による運送業を通して深い関係が出来ていたのでしょう。また安羅国との交易関係によっても結ばれていたように思います。

継体大王は交野の樟葉で即位しました。交野は荒籠の根拠地です。仁徳天皇などのように河内に都を置く例がありますから、樟葉というのが特別というわけではありませんが、大和よりも樟葉を選んだことは、継体が大和入りを警戒したと同時に荒籠の後ろ盾を期待したものと思われます。そして当時の半島情勢を考えますと、大和よりも樟葉のほうがベターな選択だったでしょう。継体はその後遷遷都を2度行いますが、それは筒城宮（木津川流域）であり乙訓宮（桂川流域）であって、共に淀川から難波津、瀬戸内海、九州へと通じ、半島へと繋がっていくに便利な立地であります。しかも共に裏日本、越前方面へも繋がる交通の要衝です。対外的にも体内的にも考えられた好立地と言えると思います。

継体が筒城宮に移った直後の512年に、大伴金村が馬韓の上哆唎・下哆唎・沙陀・牟婁4県を百済に割譲します。この地域には倭国から渡来した人が多く住んでいました。日本式の前方後円墳も発見されています。そして513年には蟾津江流域の己紋・帯沙2郡も百済に割譲します。割譲と言っても実際は百済がこの地域に勢力を伸ばしてきて、倭国の権益を放棄させたということだと考えられます。この時の百済の王が武寧王です。武寧王の南下政策の結果が、日本書紀には金村の割譲という表現になっているのです。

この百済の進出はわが国と友好関係が深かった伽耶諸国にとってもたいへんな脅威でした。東からは新羅の圧迫が強かったところへ西から百済の脅威が加わったのです。その上に、伽耶の地域において新羅と百済がぶつかり合うということになりました。金官伽耶を中心に大きな権益を持っていた倭国としても黙っているわけにはいきません。継体大王の乙訓宮への遷都はこのような情勢下

で行われます。半島情勢への対応と見てよいのではないのでしょうか。

大和に対しては一步後退したように見えますが、この乙訓宮から大和の豪族への対策も行われたのではないのでしょうか。継体が大和の磐余玉穗宮に入る526年まで乙訓宮に8年間おられました。そして大和入りするとすぐに、百済・伽耶・新羅問題の解決のため近江臣毛野を総帥として6万という大軍を半島へ送ります。その軍が新羅と結んだ筑紫国造磐井によって阻止されると、物部麁鹿火を送って鎮圧させます。継体のこの俊敏な行動は、乙訓宮での周到な準備なくして考えることが出来ません。

物部麁鹿火に鎮圧された筑紫国造磐井は地方豪族の中でも大和政権が一目置く存在だったでしょう。その磐井は、百済への任那割譲によって半島における利権を大きく損なったのではないのでしょうか。磐井が新羅と結んだ背景にあったような気がします。磐井はこうして近江臣毛野の進軍を阻止しました。磐井の抵抗は強く鎮圧には1年半かかっています。

地方豪族国造の勢力はこの磐井の乱の鎮圧によって大きく後退し、大王の権力が増大しました。地方には大王政権から国司が派遣されるようになり、また各地に屯倉（大王の直轄地）が置かれるようになります。

一方毛野臣は529年になってやっと伽耶（任那）に進軍するのですが、毛野のやり方の拙さもあって問題解決に至らず交渉は失敗に終わります。毛野臣は失意のうちに帰国するのですが、途中対馬で死んでしまいます。

その遺骸を迎えるため枚方まで来た毛野臣の妻が詠んだというのが、ヒラカタの初出と言われる次の歌であります。この会場の隅のところにもこの歌を刻んだ碑が立てられています。

ひらかたゆ 笛吹きのおぼる 近江のや 毛野の稚子い 笛吹きのおぼる

百済の聖王は都を熊津から泗泚（現在の扶余）に移します。白馬江の下流域へと遷都したわけですが、海への進出が容易な地を選んだのは、高句麗と新羅に対する戦略的配慮だったでしょう。わが国では継体のあとの欽明天皇の時代となっておりますが、この遷都の年538年に聖王はわが国に対して仏教を伝えています。新しい天皇に対する表敬もあったと思います。

その頃伽耶諸国は新羅の勢力に押されて新羅寄りの姿勢を見せていましたし、その伽耶（任那）を倭国に引き戻そうと任那復興会議が行われたりしていますが、新羅の力は徐々に増大して行き、562年には金官伽耶が新羅によって滅ぼされてしまいます。わが国ではこれを任那日本府の滅亡と表現していますが、これによって半島における日本の権益は一挙に衰退してしまうのです。

中国においては304年から続いてきた五胡十六国、南北朝という戦乱の時代が終わって589年に隋が建国しますが高句麗攻撃の失敗から滅亡し、618年に唐が建国して安定の時代に入っていきます。

以上が三国時代中期の動きです。

（3）三国時代後期と百済の滅亡

さて、欽明天皇やその後の天皇は任那の復興に意欲を燃やしまして、推古天皇時代の600年には倭国が新羅を攻めて一時伽耶の一部を回復するということもありあました。しかし新羅は倭との関係を完全に断絶しようとしたわけではなくて、押したり引いたりと上手に立ち回っていたようです。そして、いつの間にか新羅が伽耶の殆どを支配することになってしまいました。

中国で唐が建国すると、やはり半島にも勢力を伸張しようとし、これを契機として高句麗、百済、新羅の3国間の紛争が激化します。642年になりますと百済の義慈王が新羅に支配されていた伽

耶地域に進出してこれを奪還します。ここは元々倭国の勢力が強かったところですから、義慈王は倭の介入を恐れて王子の豊璋と禪広を人質として倭国に送ります。660年になって、半島への進出を企てる唐と百済への反攻を図る新羅の思惑が一致して両国は連合して百済を攻撃します。その対応に準備が整っていなかった百済は、わずか10日間の戦闘で滅んでしまいました。

百済滅亡直後から、王族の鬼室福信らが百済復興軍を組織して倭国にいた豊璋を擁立し、倭の支援を受けて新羅・唐の連合軍と戦いました。しかし福信と豊璋が戦略上対立し、豊璋が福信を殺害してしまうという事件が起こって復興軍は戦意を喪失してしまいます。そして663年、白村江(白馬江)の戦いで倭の水軍が唐の水軍の前に壊滅し、復興計画は失敗に終わります。こうして百済は完全に消滅してしまいました。

その後新羅は高句麗をも滅ぼし唐をも駆逐して半島を統一します。それが676年のことで、三国時代はここに終焉することになります。

百済復興軍に力を貸したのは女帝の斉明天皇と摂政中大兄皇子でした。わが国としても新羅によって半島での利権を奪われたわけですから、百済の復興支援は当然のことだったでしょう。王子豊璋に大織冠という最高の冠位を与えて送り出し、天皇自ら九州に赴くという程の力の入れようでしたが、天皇は九州で病没されます。中大兄皇子はこの復興計画の失敗によって、唐がわが国にも進攻してくるのではないかと恐れて、対馬をはじめ各地に山城や水城を築きます。そして大和に帰らずに大津に都を造営し即位して天智天皇となります。

百済王子の一人禪広は、664年にその天智天皇によって摂津国難波に土地を与えられ百済からの亡命者などと一緒に関を渡りました。JR 環状線の寺田町から桃谷に掛けての一带です。百済という地名の場所もありました。禪広はまた690年に持統天皇から「百済王(くだらのこにきし)」という名を与えられて、百済からの渡来人や亡命者の中でリーダーとしての地位を確立します。これは百済王族がわが国天皇の臣下となったことを意味することになるのですが、百済王家がわが国で活躍できる基礎が作られたことにもなります。

(4) 大仏建立と百済王敬福

今年(662)は平城遷都1300年の年になります。元明天皇という女帝が710年に飛鳥から奈良へ遷都されました。元明に次いで聖武の伯母に当たる元正天皇が即位し、その次に聖武が天皇となりました。聖武天皇の即位は724年のことです。それから25年間皇位にありましたから、平城京74年の3分の1を占めています。しかも大仏建立という大事業を行っていますから平城京イコール聖武天皇というイメージが強いようです。

病弱の文武天皇を父とし、藤原不比等の娘でノイローゼのために監禁されていたという宮子を母とする聖武天皇は、やはり生まれつき病弱であったでしょう。皇后もまた不比等の娘である光明子で、全く不比等の管理下にあったと言えますから、聖武天皇が常にノイローゼ気味であったと言われているのも肯けます。

729年に長屋王の変という事件が起こります。これは、藤原の光明子を皇后に立てたことややはり藤原出の宮子に皇太夫人の尊称を贈ったことなど、藤原不比等の専横を咎め立てた長屋王が、天皇への謀反を企てたという罪を着せられて自刃するという事件です。天武天皇の孫という長屋王でさえも藤原氏によって陥られたのでした。そんな時に全国的な大飢饉が発生します。更に天然痘が大流行して朝廷の重臣たちが次々に死んでしまいます。

こんな中でノイローゼが高じた天皇は5年間に及ぶ彷徨の旅に出られます。先ず木津川のほとり

に恭仁宮(くにのみや)の建設を始めます。かなりの造営が行われたのに今度は紫香樂宮の建設です。この紫香樂で大仏建立の発願をされました。紫香樂遷都に反対する重臣たちが不審火を起こすなどして天皇を脅かしましたので、今度は難波宮へと逃避されます。そして重臣たちの意見をやっとな聞き入れて平城京に戻られました。

天皇は大仏建立に際しまして「国中の銅を集めて仏像を造り、広く朕の知識(寄進者)を集めて、ともに利益を受け菩提を招致したい。国中の富は全て朕のものであるから、これをもって大仏を造ることはたやすいが、無理矢理に寄進をさせることは仏の御心に反することである。だから知識に加わろうとする者は、毎日盧舎那仏を心に念じて、自分が大仏を造るのだという気持ちになってほしい。国司や郡司はこのことを口実に百姓を徴発したり、増税したりしてはならない」。寄進者がみんな一緒に利益を受けるのだと言っておられます。そして国中の富は自分のものであるが、寄進を強制してはならないという配慮もしておられまして、ノイローゼとはとても思えない立派な詔です。こんなところから聖武帝は本当はたいへん強い天皇であったのだという説も出てきます。

大仏建立は745年から始められました。工事は順調に進められて鑄造は749年に完成に近付くのですが、仕上げの鍍金に使う金が足りません。そんな時に陸奥守百済王敬福から金900両が献上されました。タイミングがよくてちょっと出来すぎた話しですが、大仏建立の指導者だった仏師国中公麻呂という百済亡命者の子孫が、百済王敬福と仕組んだのではないかと考えられます。

ともかくこの金献上によって取りあえず金鍍金の工事に入ることが出来、天皇は敬福を7階級特進させられ宮内卿河内守に榮転させられました。百済王一族はこのとき交野に土地を与えられて移住します。それが百済寺跡のある枚方中宮の地であります。百済寺の前に何らかの建物があったことが確認されていますので、百済王敬福は未開発の原野を与えられたのではなくて、既に開発された土地に新しい支配者としてやってきたようです。そこを更に開発整備し、氏寺として百済寺の建立も行われました。

この百済寺を敬福が建てたというのは疑問です。出土した瓦の製作年代から見て、百済寺は奈良時代末期の780年頃に建てられたものと推定されています。敬福は766年6月に亡くなっているので建設はそれ以後です。敬福が発願した可能性は否定できませんが、建設された時には亡くなっていたということになります。

敬福は河内守に榮進した後も、常陸守、出雲守、伊予守、南海節度使、讃岐守、外衛大将、などを歴任しています。その時々的重要地点に送られた感じがします。百済王の軍事力を買ったのものと考えられます。聖武天皇から桓武天皇の時代に掛けては東北で蝦夷の問題が大きくなっており、渤海や新羅への対策もあります。百済王の軍事力はその時代において必要不可欠なものであったと想像できます。

(5) 桓武天皇と枚方

さて、大仏を建立された聖武天皇は退位して娘の阿倍皇女が即位し孝謙天皇(重祚されて称徳天皇)になりますが、独身の女帝には当然跡継ぎがありません。跡継問題がごちゃごちゃして最後に藤原氏によって擁立されたのが白壁王子で光仁天皇となります。光仁が即位したときには60歳を過ぎていたと言いますから、問題の複雑さが分ります。光仁は皇太子として山部親王を立てますが、その親王が後の桓武天皇です。親王のお母さんは百済25代の王である武寧王の子孫の高野新笠であることについては先にちょっと触れたところです。ですから、桓武天皇には百済の血が半分入っているわけで、その血統に繋がっている現在の天皇には百済の血が流れていると言って差し支えあ

りません。このことは天皇本人がお認めになっている事実であります。従いまして天皇は百済について大層興味を持っておられ、明日講演頂く上田正昭先生は、天皇の招きを受けて百済のことを詳しく進講されたそうです。そのことも明日お話しが伺えるのではないかと期待しているところです。

光仁天皇は病気のため山部親王に譲位されたのち間もなく崩御されます。781年のことです。桓武帝は即位するとすぐに遷都を計画されたようです。平城京は70年を経て老朽化ということもあるでしょうし、山部親王立太子に当たっての皇族殺害事件などが桓武の心に深く傷を付けていたでしょう。後に長岡京造営中に責任者の藤原種継が暗殺されるという事件があり、その首謀者として天皇から嫌疑を掛けられた天皇の実弟早良親王が抗議の断食死を遂げるということが起こります。天皇は早良親王の怨霊を恐れて長岡京を捨てて平安京へと向かうことになりました。これを考えますと、平城京から長岡京へと遷都された要因として、皇族殺害事件、即ち井上内親王とその子他戸親王が殺害された事件が大きなウェイトを占めていたと考えられます。

長岡京に遷都した桓武は、中国の儀礼に従いまして都の真南に当たるところに郊祀壇を築き、天帝を祀ります。天帝とは即ち先帝光仁天皇です。郊祀壇の場所は特定できないのですが樟葉宮跡、即ち交野天神社のある付近ではないかと言われております。長岡京から真南に当たるわけです。他にも候補地がありますが確証はありません。

樟葉から中宮の丘陵一帯は交野が原と呼ばれて貴族たちの狩猟場になっていました。狩猟は昔は単なるお遊びではなくて軍事訓練の場でもありました。東北地方の蝦夷征伐に明け暮れた桓武の時代には軍事訓練は大切だったでしょう。桓武天皇の交野行幸は長岡京時代に5回、平安遷都後に5回と合計10回に及んでいます。

その交野行幸の折に行宮として利用されたのが右大臣藤原種継の屋敷でした。この屋敷がどこにあったのかは定かではありません。樟葉に種継屋敷という小字名があるそうですから、そこだったかも知れませんし、一般的に言えば百済王の本拠で街の整備が進んだ中宮の地だと考えられます。百済王神社の鳥居のそばには桓武天皇行宮跡の標識があります。どちらにしても枚方であります。

種継の正妻は百済王明信といい敬福の孫娘に当たります。才色兼備のすてきな女性であったようです。桓武帝は皇太子時代の771年に光仁天皇のお供をして交野を訪れておられます。百済王敬福は既に亡くなりその子理伯の時です。明信はきっと皇太子山部皇子の接遇に当たったでしょう。その時から明信のことが山部皇子の脳裏に焼き付いたものと思われれます。天皇となられ長岡京に移ってからの785年に桓武は天皇として初めて交野即ちこの枚方に行幸されました。既に藤原種継の夫人となっていた明信が接待の主役を務めたでしょう。そしてこの時からすぐに明信は従四位尚典(ないしのすけ)に任じられます。尚典というのは内侍司(ないしのつかさ)今の宮内庁の次官ということです。いつも天皇のおそばにいてお世話をする、そんなお役所の次官になったのですから、桓武帝の思召しがあったと考えていいと思います。明信はその後も尚侍(ないしのかみ)即ち宮内庁長官になり、地位も従二位へと昇進します。当時の女性としては破格の取り扱いです。

明信のこのような栄達に伴って、百済王家の女性たちがたくさん宮廷に入ることになります。桓武帝のお母さんが百済系であったこともあって、「百済王は朕が外戚なり」と詔を出されたように、百済王を特別の目で見られておられたことは論を待ちません。明信に対する桓武天皇の情の中にも百済が強く意識されていたことでしょう。

桓武天皇と枚方を結びつけたものは百済でした。継体天皇をはじめ、日本の歴史の中に枚方が深く関わったのは百済との関係においてであります。その記念的な存在が百済寺跡です。どうぞ皆さん、国指定特別史跡百済寺跡を大切に考えて頂きたいと思っております。有難うございました。